

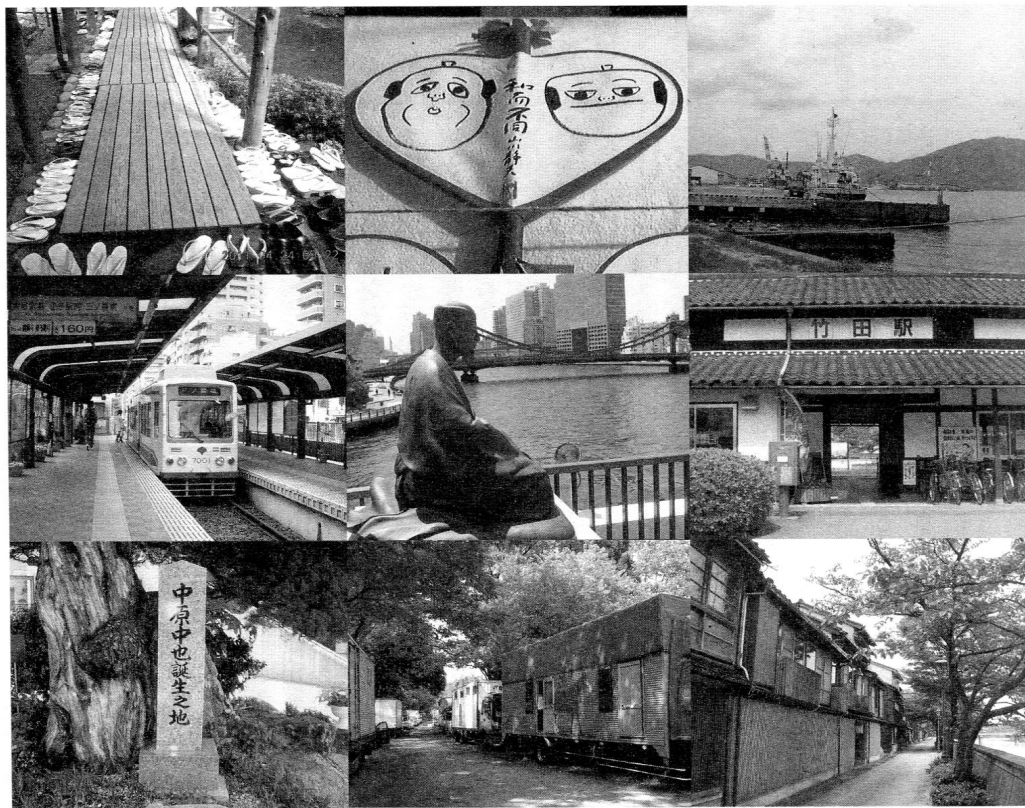
# 船団

●第90号

特集Ⅱ 俳人たちのひとり旅



# 特集 俳人たちの ひとり旅



福井市

## 坪内稔典

柿若葉ひとりの旅の柿若葉

よく晴れて棚田の端の余り苗

ねじ花が曙覧の塾である天気

五月の半ば、福井市へ行つた。幕末の歌人、橘曙覧を訪ねたのである。

列車の窓に頬杖をつけて琵琶湖の西岸を眺め、湖北の植えたばかりの田圃を眺め、福井に入つて、「あつ、柿が多い」と気づいた。今庄という町には「干し柿の里」という看板が立っていた。「しまった、干し柿の里を訪ねるのだった」と思ったが、もう後の祭、列車は福井市に着いてしまった。

曙覧の記念館を見てから、記念館前の坂道をたどつて足羽山に登つた、道端のイタドリをかじったら、すっぱい緑が口中に満ちた。

駅前に一泊し、翌朝早く、城の周りや福井市中央公園を歩いたが、散歩する大型犬に何頭も出会つた。私の家の周辺は小型犬ばかりなのでちよつとうれしい気分になった。大型犬が好きなのだ。偏見だが、大型犬こそが犬らしい、と思つている。

第三回船団賞受賞作

## 眠る子

星野早苗（一九五六年生）

顔といふ荒野に触るる春の月

そこにある桜の頃の非常口

千の雫千の楓の芽に宿る

柿若葉抱けば泣かない赤ん坊

青年を遠く眺むる夏木立

猫は頭を低くして来る夏の果

裏返ることも命や葛の原

階の百段濡るる水引草

秋燕地図も着替へも持たないで  
月に行くための音楽聴いてゐる  
轡虫夜通し兄を捜しけり

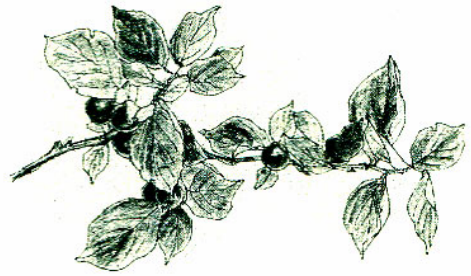
落ちてくる少女を拾ふ枯野かな  
眠る子を私したる落葉かな

通せんぼすれば帰りぬ雪蚩

初氷帽子に入れて登校す

身に纏ふなにもも無き山眠る  
オリオンや髪の冷たき人とゐる  
出国やぱりりと冬の耳破れ

縫ひ目無きイエスの着物冬の風  
何処の子と知らぬ子とゐる春隣



# 会員作品

坪内 稔典

梅雨晴れて藤樹書院へ鯖寿しへ  
与右衛門が藤樹先生梅雨晴れる  
ひばりひばり開けつばなしの藤樹塾  
珈琲とざくろの花と蟻二匹  
鮫かつぐ男青葉の雨上る  
二、三人青葉の村へ鮫かつぐ  
鮫食べる村の青葉のゆさゆさと

中原 幸子

冬銀河ふたごの一人泣くことも  
春は名のためのレールまっすぐ平行に  
母になる母のように、あ、桜  
子の目玉母より大き新樹光  
うふふふ続うふふふ合歡の風  
カタバミは実にその件は一笑に  
ワンコイン借りた返した心太

火箱 ひろ

どの路地も昭和少々春少々  
よもぎ餅国道一号線渡る  
豆の花明朝体のような彼  
雲雀野や一人おもらし一人駄々  
御当主は坊ちゃん顔で花咲いて  
水餃子ぷるつとつるつと花曇り  
高句麗の風吹くカフエ五月来る

陽山 道子

腰痛の三人集る草木の芽  
耳朶のうごく少年春の風  
花の雨駅に二宮金次郎  
輪読の「墨汁一滴」花は葉に  
春キヤベツちぎって蒸して塩コショウ  
緑立つ君は直毛われ猫毛  
だれかれに話してみたく春の蟬